

## 班ノートを取り入れた学級指導

松 本 欣 一\*

### I はじめに

教育は、全人的な人間形成を目ざすものであるといわれる。概念的には、わかりきっていることでありながら、現実に生徒に直面している私にとって、どういう実践をすることがそのことにつながるのかと問われると、とまどってしまう。誤った職業意識から、ついおしつけがましい指導に陥ってしまうのである。そして、もっと生徒の現実の姿に目を向けなければならないと反省させられるのである。

人間は、個性的存在であると同時に、社会的な存在でもある。だから、組織的な教育は集団自体の中で行なわれなければならない。そういう意味で、学級は学校教育の基盤であり、その中で、生徒は教師の影響以上に仲間の影響を受けて成長するのである。

このような観点から、グループノートを通じて、そこに現われる生徒の現実、にできるだけすなおに耳目を傾けてみたいと思ったのである。それには、おかげさ言えば私自身の人間形成の意図もこめられている。

### II 実践の目的

個人の持つ悩みや苦しみも、学級内の友人たちに変えられることによってやわらげられ、励まし合うことでお互いの向上がはかれるものと思われる。そういう相互作用を基調にして、生徒の成長を見守りたい。

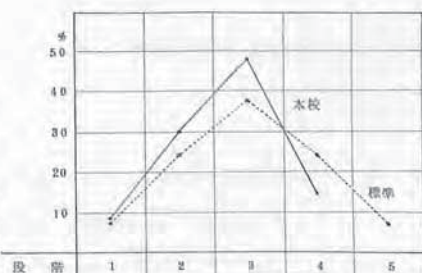
### III 学級の実態

中学3年生1学級 男子21名、女子23名 計44名

#### 1 知能検査の結果

教研式・学年別知能検査（48・1・22実施）

図1に示すように、全体として、きわめて低い方へかたよっている。男女の差も確認してみたが、ほとんど性差は見られない。特に問題なのは、5段階に属する生徒がいないことである。4段階の生徒も少ない。



(図1) 知能偏差値分布

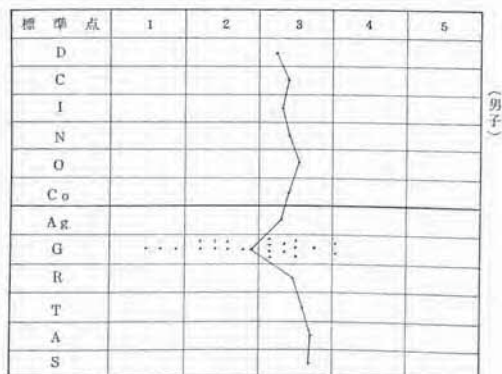
## 2. 矢田部・ギルフォード性格検査 (49.2.15実施) — 男子21名, 女子21名 —

## (1) 学級全員の各因子得点の平均値

(表1) 矢田部・ギルフォード性格検査(学級平均値・標準偏差値)

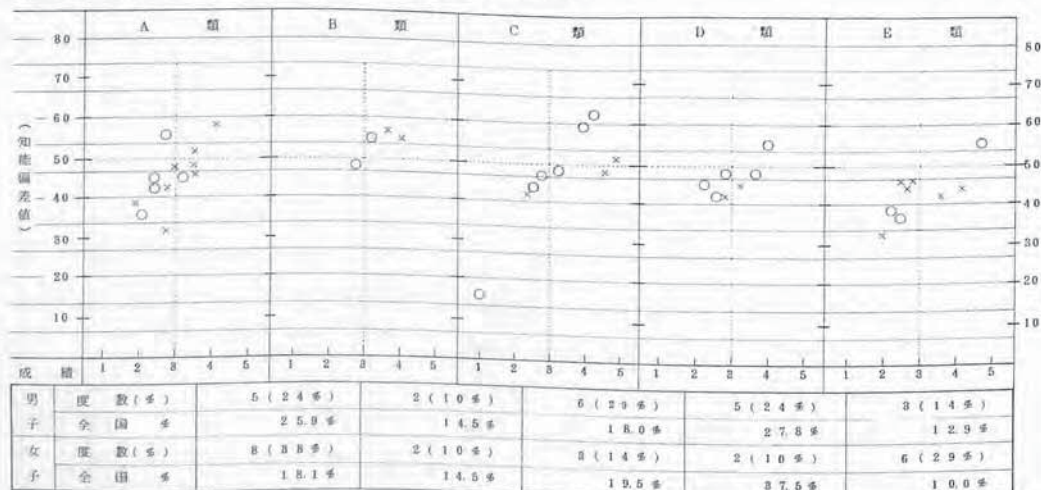
	因子	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
男子	学級平均値	8.1	9.3	8.5	8.1	8.7	9.6	11.2	9.3	11.8	10.9	10.3	11.8
	標準平均値	5.51	4.61	4.56	5.10	3.93	4.19	2.88	3.08	3.08	3.04	3.57	3.51
女子	学級平均値	12.4	10.7	12.2	10.6	10.2	10.7	10.0	8.3	11.4	9.8	8.4	11.7
	標準平均値	4.27	3.97	3.36	3.98	4.16	3.54	2.64	3.51	3.63	3.44	3.12	3.30

これをプロフィールに描くと図2.3のようになる。なお、特徴を示す下位検査項目は、度数をドットで示した。

(図2) Y・G性格検査平均点プロフィール  
(・は度数分布)(図3) Y・G性格検査平均点プロフィール  
(・は度数分布)

## (2) 知能・学習成績との相関

類型別に度数分布表にあわせると、図4のようである。



(図4) Y・G性格検査類型別度数分布 (O — 男子, X — 女子, 成績 — 5段階評定合計/9, 全国%は、中井節雄「人事検査法」: 義務教育学校における7年間の入学者を対象にした結果による。)



### (3) 考察

まず第一に目につくことは、男女とも非活動的な性格が強いということである。特に女子は、それが劣等感と結びついているのではないかと推察される。それは、男子に比較して、女子が服従的な性格が強いということにもあらわれている。物事にこだわらないのんきさが救いとなっているのだろうが、概括的に見て、女子はB型傾向を持っている。

そのことは、類型分類にも明確にあらわれ、女子のB型の割合はきわめて高い率を示している。それと対応するようにD型がきわめて少ない。A型の高率ともあいまって、女子の方に相当な問題があるようである。ただ、男女ともにB型(不安定・不適応・積極型)がやや少ないということが、クラス全体としては救いとなっている。

## 3. 家庭環境

### (1) 田中式 家庭環境診断検査 (49.2.15実施)

学級の平均値を出し、プロフィールを描いてみたが、男女差は見られず全体的に見て標準的なものであった。文化的状態がやや高く、家庭の一般的状態も、わずかに高い数値を示しているが、総じて、クラスの生徒の家庭は、平均的な家庭であるといえる。

### (2) その他

地域は、純農村であったが、近年、新潟市のベッドタウンとして団地の造成が盛んであり、農家の家庭環境も大きく変化しつつある。学校で調査する「家庭の調査表」にある父親の職業を「農業」と明記してあるのは18人(41%)で、実際に母親などが農業にたずさわっている者を入れても、23人(52%)にすぎなくなっている。

## IV 学級指導の基本的構えと班ノート

### 1. 学級指導の構え

小集団指導を基調にして、学級を集団としてとらえ、その基礎である心理的結合を増すために、理解と信頼にもとづく所属感・連帯感を養う。そのため、次のような点に留意する。

- 自由と平等の原則に従って、気楽に各自の意見を発表し合えるふん囲気を作る。
- 意見の多様性を大切にし、互いに刺激し合って向上できるよう援助する。
- 生徒の意見にすなおに耳を傾け、励ますことによって、自主的で積極的な態度を育てる。

### 2. 班ノートの導入

上記のような学級指導の構えを中核として班ノートを導入する。忙しい学校生活の中にあって、教師と生徒、生徒相互の気持を通じ合う手だてとして班ノートが重要な役割を果たすと思うからである。その取り扱いにおいて注意したいことは、記事内容に対する性急な評価や指導はさけるということである。そして、学級へのはたらきかけとしては、単純な朗読、問題提起と感想発表、などである。また、段階が進めば、個別指導にも活用したいと考えている。

## V 実践の経過

### 1. 部落バスをめぐるって

4月の中旬から、部落バスの問題がいろいろと書かれるようになった。そこで、学級に働きかけ、極力生徒の目をその問題に向けさせた。方策としては、班ノートの朗読・教師の感想発表などである。

4月15日 K・M (前半省略)

話はわかるが、部落バスはやらない方がいいと思う。行つても全然おもしろくない。やる気がないから自分のためにならない。だいたい、2時間もやったって、時間のむだだと思う。また、自分の勉強と合わない場合が出てくると思う。

K・Mの文章に誘われるように、この問題に対する意見が次々と現われ、自分の体験や意見、さらには改善の方策が書かれた。そして、K・M自身が次のような文章を書くに至った。

4月22日 K・M

班ノートはすごくいい。前の学校はこういうものではなく、その上、3年生だけでも7クラス、これだけの人数だから、人をわかろうと思っても一部の人か、表面的なことしか見えない。人の考えなどがよくわかる点で、ほんとうに班ノートは有効だと思う。

それに、部落バスのことをみんなが書いてくれて、本当に助かった。班ノートがなかったら、また、明日の部落バスも行かないだろう。でも、明日からは行こうと思っている。最初に部落バスに行かなかった時から、はくの心の中で悪魔がはくを征服していたのだ。6時15分ごろになると、急にそわそわして、わざと用事があるようなまねをしたりして、みんなをごまかしたり、あるときは、いつでもいいのに新羽へ行って「ちりとり」を買ったりして、自分をごまかしていた。でも、これからはだいじょうぶ。しかし、いつの日か、この心がくずれる時がくるかもしれない。そんなときは、また、班ノートを読み、自分をただしたいと思う。

まことに調子がよすぎるのだが、現実とはそれほど単純ではない。彼は、その後も時々部落バスを休んでいるのである。清掃や休み時間など、極力話しかけるようにはしているが、彼自身の変容というところまではいっていないのが実状である。とにかく、班ノートそのものについては、生徒の意見をそのまま受け入れることに努力を集中し、個人の持つ問題については機会あるごとに話しかける以外にないと改めて痛感させられる。

### 2. 班ノートの意義をめぐるって

特別積極的な指示を書かない教師の短評も、生徒にとっては興味弄的であると同時に、生徒は生徒なりに班ノートの意義を見出し始めた。それは、K・Mの記事でもわかるが、次のようなものもある。

4月30日 Y・H

(学習、その他の悩みを2ページにわたって書いた後)。もしかして、私はくだらないことを2ページも書いたのではないのでしょうか。綱の糸が1か所ほどけたような気がします。書いてよかったと思う。

5月4日 A・H (前半省略)

班ノートを書くとき、家のみんなは寝ています。私はこんな時が一番好きなのです。とても心が落



ち着き、いろんなことを考えます。もちろん高校のこと……でも、今は自由について考えました。私にとって自由とは、遠くへ一人で行くこと。目にしみる朝日や夕日をながめているとき、友だちとしゃべっているとき……。でも、人間は自分で自分自身や他の人々の自由をこわしているんじゃないでしょうか。みんなは、自由をどんなふうに考えているのか教えてください……。

こんなに班ノートを書いたのは初めて、とてもいい気持ち、胸の中にあったものを全部書いたから……。体が雲の上にあがっていくみたい。では、これで……。

### 3. 私をめぐる諸問題

班ノートには何を書いてもいいのだという生徒の気持は、やがて今までうっせきしていた私自身に対する痛烈な批判となって現われてきた。私も、これに負けてはこれまでの努力が水泡に帰すると思ったので、すすんでこれを学級全員の前で朗読し、さらに厳しい批判をするようにと呼びかけた。

5月15日 S.S (前半省略)

私の、先生に対する気持は、たいへん変化しておかしなものなのです。「あゝ、やっぱり先生だな、いいところがあるなあ。」とか、「もう、頭にくるなあ。」とか、さまざまなのであります。はい。単純で、すぐ笑うこともあれば、ものすごくこわく、ばかみたいにおこってみたい。先生とは、おかしなものですね。安月給で、あんまりいい仕事でもないのに、教師という仕事をしているなんて。先生、私は別に悪きでこんなことを書いたのではありませんからおこらないでください。私は、今、はっと思ったんですが、先生がなぜ教師という仕事をやっているのか、そのわけがなんだか知りたくなりました。もし、よろしければ教えてもらいたいのですが……。

6月23日 H.W (前半省略)

私たち3Aは、先生と生徒の交流が浅いと思います。その原因は何でしょうか。そうさせているものはなんのでしょうか。クラスの人と先生と、一度話し合ってみないと、ますます3Aは悪くなると思う。

6月24日 Y.H (前半省略)

先生は、クラスを作るのは私たちだと言います。でも、そんなものは“うそ”です。1年A組も2年A組も、そして3年A組も変わらないではありませんか!!2年A組(3年A組)には、1年A組と1年B組から半分ずつ分かれてきたはず。クラスを作る私たち生徒が半分入れ変わったのですから、1年A組と2年A組(3年A組)は違っているはず。それが同じだということは、いったいどういうことでしょうか。私は、クラスを作るのは先生だと思います。(以下省略)

7月1日 A.S (前半省略)

思いついたこととして、自分の言いたいことをはっきり言えはいいのに、わざわざ遠まわしに皮肉っぽく言うこと。それと、学活などの時間に話すあの長話。どうも、自分のインテリを鼻にかけたエゴのかたまりというようにしかとれない。これは、ぼくの意見だが、他の人はどう思っているのでしょうか。

これは一部分であるが、こんな調子で責めたてられたわけだが、生徒の気持としてみればいまいちもったもな話でもある。開き直ってみたところで問題が解決するわけではない。要は、態度と実践でこたえていくよりしかたがないのである。そう、くりかえし自分に言い寄せた。

### 4. 球技大会をめぐる

学期末に入って、生徒会主催の球技大会が行われた。期末テストが終わると、各班ノートは球技大会の記事でうめつくされた。クラスのふん囲気もそれにつれて盛り上がり行ったようだ。バラバラにみえたクラスのメンバーが実践活動を通して一つにまとまっていった。

7月13日 Z・T

球技大会も近づいた。3年生はいちばん長くバスケット、バレー、ソフトをやっているのだ。それに、記録会はげっぱだった。そのようなことにおいて、球技大会には3年A組の実力をもって、全項目とまではいなくとも、2種目は優勝をかざりたいものだ。みんながんばりましょう。

7月18日 S・K

今日の球技大会のとき、はくたちのソフトボールはおしくも3Bにやぶれた。ちくしょう、せっかく逆転して、また同点にして、いろいろな危機もあったが、延長戦にもちこんでがんばったのに、結局最後は逆転負けした。ちくしょう、おもしろねえなあ……。もうひといきだったのに。わざわざ先生も応援にきたのになあ。やっぱり練習不足だったんだなあ。もう少し練習しておけば勝てたのになあ。

7月19日 K・T

きのうのソフトボールの試合、そのあとほんとうにくやしいと思いました。あんな気持ち初めてでした。でも、みんなが一生懸命やったし、私も一生懸命やれたので、それはいいのだけれど、どうしても頭からはなれないのは、ルールを知らないためにうまくいかなかったことで、それが残念でなりません。私は、2年生の時に授業で習ったけど、試合をやったことがなくて、ほかのクラスの試合を見たり、教科書を見たり、人に聞いたりしたけど、やっぱり実際にはうまくいきませんでした。即席じゃだめですね。

7月19日 M・S

7月17日から今日まで、球技大会が行われましたが、今までになくみんながんばったと思います。先生と生徒がいつしょになって応援したり、練習したりして、とても楽しくすごせました。また、男子のバスケットと女子のバレーのように優勝したところは、みんな喜び合い、おしくも負けてしまったところは、みんなでくやしがりたりして、いつもばらばらな3Aがこの3日間は生きかえったようでした。いつまでもこんな3Aならいいと思いました。(以下省略)

改めて、実践活動の大切さを思い知らされた。私たちの努めなければならないのは、ことばで理屈をこねまわすことではない。実際に自分の体でぶつかって行くことだと思う。班ノートの記事にも、ようやく自分を見つめようとする姿勢が見え始めてきた。

#### Ⅳ おわりに

ここに載せたのは、1学期中の実践の歩みという形になってしまった。2学期に入って、生徒たちは自分たちの学習態度に目を向けはじめている。そこでは、指導教師に対する感想や意見のほかに、自分たち自身のことにも目を向けてきている。授業をよりよいものにし、もっと効率を高めるためには、まず、自分たち自身の態度を改めて行かなければならない面があるのだといった記事が目につく。一応、自分を見つめようとする姿勢が出てきているのではないかと考えているのだが、実践の最初の部分でも述べたように、その姿勢や考え方がそのまま態度に反映しているとはいえないようである。

また、ここでは取り上げなかった問題もたくさんあるわけで、実際の学級指導の中では、それらについても考えていかねばならないのが現実である。つくづく、私自身の力のなさを感じさせられると共に、学級を集団として高めて行くことのむずかしさを思い知らされている。

とにかく、今後とも、毎日提出される7冊の班ノートに目を通し、それを通じて生徒と共に悩み、苦しみ、努力することによって生徒と私自身を少しでも向上させることができたいと思っている。さらに、今後は、生徒と触れ合う機会をできるだけ多く持ち、各自の持つ悩みに直接かわりを持てるようにしていきたい。